

カップメン

長谷川 智久

* 登場人物表

佐藤 彰 (17) 札幌在住の高校2年生、「アツキ」はあだ名。
高山 トーコ (17) 札幌在住の高校2年生、彰のクラスメイト。
佐藤 章次 (77) 彰の祖父。

SE シャーペンで、紙に何か書いている音、ピタッととまる。

佐藤「はあ、勉強勉強。もうウンザリだ、変化の無いこんな毎日！」

M

佐藤(MO)「両親が沖縄旅行に出かけた十七歳の夏休み、僕はある決心をした。他人には対した事じゃないかもしれないけど、僕にとっては大きな決断だった」

タイトル「カップメン」

M ノリのいい洋楽のダンス音楽。

SE ネット将棋をさす音。

章次「うーん、そこで飛車をうごかすとは……こいつなかなかやりおるのう」

SE 襖の開く音。

佐藤「じいちゃん、ちよつといいかな？」

章次「(怪訝な声) コラ、彰、襖開けるときは、きちんとノックしろ」

佐藤「ごめん、あっ、ネット対戦の将棋中か……て、この曲、じいちゃん、また俺の部屋のCD勝手に持っていったな」

章次「ああ、この曲か？ 久々のヒットだな、次の一手が浮かぶ浮かぶ。ふん、ふん、ふん、オー、イエイ！」

佐藤「もう！ 勝手に人の部屋に入らないで、つていつも言ってるじゃん」

章次「男同士で固いこというな。部屋に入られて困るものもあるのか、あっ、もしかしてエッチな物でも隠してるのか。へへへ」

佐藤「(慌てながら) な、何いってんだよ、そんなもん隠してないよ」

章次「ははは、冗談冗談、で？ 何か用か？」

佐藤「あ、うん、じつは……俺、東京に行きたいんだ……」

SE 将棋の駒を動かす音。

章次「観光か？」

佐藤「違うよ、向こうに住みたいんだ」

章次「いつから？」

佐藤「いますぐにでも」

SE 将棋の駒を動かす音。

章次「学校は？」

佐藤「辞める」

章次「お父さんとお母さんには話したのか？」

佐藤「話してないよ」

章次「なんだと真面目に聞いてくれるってか、よし、きた！ ここで、王手だ！」

SE 将棋の駒を置く軽快な音。

章次「それで、東京行って何をやる？」

佐藤「俺、このまま勉強して大学行って、父さんみたいなサラリーマンになる、先の決まった人生を歩みたくないんだ」

章次「東京行って何かしたいんじゃないのか？」

佐藤「まだ決めてない。東京行って知らない土地で未知の可能性を探してみたいんだ」

章次「未知の可能性か……そいつはここには、無いのか？」

佐藤「札幌は狭すぎるよ」

章次「狭いか……で。俺に何をしてほしい？」

佐藤「東京に行く軍資金を貸して欲しいんだ」

章次「軍資金ねえ……」

佐藤「お願い！ ね、いいでしょ？ じいちゃんいつも言ってるじゃん。ボーイズビーアンビシヤスって」

章次「少年よ大志を抱けだな……、わかった、軍資金、工面してやってもいいぞ」

佐藤「ほんと！？」

章次「ああ、だが条件がある」

佐藤「なに？」

章次「うまいカップ麺を食べさせてくれ」

佐藤「はあ？」

章次「羊蹄山の麓にある京極町のふきだし公園で水を汲んでこい」

佐藤「ええ？」

章次「あその水でカップ麺を作ったら、確実にうまいだろ？ 一回食ってみたかったんだよ。うほっ、涎がたれてきたぞ」

佐藤「何言ってるんだよ。京極町のふきだし公園って、ここからめちやくちや遠いじゃないか。俺、車どころかバイクの免許もないし。移動手段、自転車しかないよ」

章次「そうか、じゃあ自転車で行ってこい」

佐藤「はあ？ 行ってこいつて、簡単に・・・」

章次「今、一時だから順調に走れば戻る頃には夜食にちょうどいい時間になるな」

佐藤「ちよつと待つてよ、本気でいつてるの」

章次「ばかもん、冗談なんというか」

佐藤「そんなの無理だよ。どれだけ遠いかわかってるの？ ここ真駒内だよ、中山峠だつて越えるんだぜ、常識で考えようよ」

章次「あー、無理無理無理、お前はいつだつてその言葉ばかりだな、そんな奴が東京で一人未知の可能性なんて探せるか、東京に一人で飛び出していく非常識に比べれば、

こんなもんは常識の範囲内よ」

佐藤「でもさ・・・」

章次「あー、じゃあやめだ、やめ。所詮はお前の決心なんてその程度なんだろ。だつたら大人しく高校卒業してお前の言う決まつた人生つてやつを歩めばいい」

佐藤「そんなこと言われたつて・・・、わか

つたよ！ 行くよ、行けばいいんだろ。水汲んできたら軍資金の件、約束だよ」

章次「(楽しんで) ああ、約束だ。その代わり制限時間は今日中だからな、0時過ぎたらじいちゃん寝ちやうからな」

佐藤「えー、制限時間あるの？」

章次「当たり前だ、人生なんて締め切りの連続だぞ」

佐藤「(渋々) わかった・・・今日中ね」

章次「それと彰」

佐藤「なに？」

章次「コンビニで水買ってくるとかズルはするなよ、じいちゃんの舌はソムリエ並みだ、口に含んだら一発で味の違いがわかるんだからな」

佐藤「バカにすんな、ズルなんてしないよ！」

章次「ふふふ、威勢がいいな。ほら時間がな

いぞ、それじゃあ、早く行った行った」

M

SE 道路を走る車のエンジン音に混じり自転車の漕ぐ音。

佐藤「本当じいちゃんはいつも無茶苦茶なんだよな。はあ、それにしても、こんな自転車

車でふきだし公園までいけるのかな？」

佐藤「つて、駄目だ駄目だ！ 何、弱気になつてるんだ。絶対に水汲んで東京に行くんだろ！」

SE スクーターのエンジン音近づく。

トローコ「おーい」

佐藤「うん？ げっ？ トローコ」

トローコ「アッキーじゃん！ 偶然！ そんなに急いでどこ行くの？」

佐藤「寄ってくるなよ、どこでもいいだろ」

トローコ「何それー？ そういうこと言われると余計気になるんだけど。どこいくのよ？」

佐藤(MO)「こいつの名前は高山トローコ。高校の同級生。金髪のショートカットに短いスカート、巷で言うコギャルって人種だ。僕とは住む世界が違うはずなのに、何かとちよつかいを出してくる変な奴だ」

トローコ「ねえ、おしえてよ！ ねえつてば」

佐藤「ついてくるなよ、お前に関わるといつ

もろくなことがないんだから」

トローコ「ちよつと何それ？ 超失礼なんだけど、ねえ、どこいくの？ ねえつて！」

佐藤「どこでもいいだろ」

トローコ「気になる、気になる、気になるうー！」

佐藤「(溜め息) はあ。あつ！ 向こうに福山雅治が歩いている！」

トローコ「えー？ どこ、どこ？」

SE 自転車が走る音。

トローコ「あ、逃げた。待ちなさいよ！」

SE 追いかけるスクーターの音。

佐藤(MO) 「トーコとの突然の出会い。唯
できえ遠くて困難な道のりなのに、僕は果
たして、この先ふきだし公園の湧き水を手
に入れ、無事、東京への軍資金を得る事が
できるのだろうか・・・」

第1話 完

SE 自転車とスクーターが並走する音。

佐藤「もう、しつこいぞ！」
トーコ「ねえどこに行くのよ！ おしえてつ
たら、おしえてよ」

SE 自転車とスクーターが止まる音

佐藤「あー、うるさいな。わかったよ、言う
よ、言うからもう付いて来るなよ」

トーコ「本当？ 何？ どこ行くの？」

佐藤「京極のふきだし公園に行くんだよ」

トーコ「ふきだし公園？ へ？ 自転車で？」

佐藤「そうだよ！」

トーコ「本気でいってるの？」

佐藤「本気だよ」

トーコ「なんで？」

佐藤「なんでって・・・」

トーコ「いいなさいよ」

佐藤「(恥ずかしそうに小声で) カップ麺の
お湯汲みに・・・」

トーコ「はあ？ 何それ？ (爆笑) きやはは
は、冗談でしょ？」

SE 笑いながら手を叩く音。

トーコ「自転車でふきだし公園にカップ麺の
水汲みに行くって・・・あんた、マジでいっ
てるの？ ここ真駒内だよ。超うけるんだ
けど、きやはは」

佐藤「(慌てながら) うるせえな、だから言
いたくなかったんだよ」

トーコ「涙出てきた。しっかし意外なだけ
ど。アッキーって頭いいし、もつと真面目
な人だと思ってた」

佐藤「こっちは大真面目だよ」

トーコ「きやはは、でもどうして？」

佐藤「どうでもいいだろ！」

トーコ「えー、教えてよ！ ちょっと」

佐藤「嫌だよ、じゃあな」

トーコ「そうだ！ 面白そうだからあたしも、
一緒にいこうかな？」

佐藤「はあ？」

トーコ「ここから自転車でふきだし公園つて
いけるもんか見てみたいし。きやはは」

佐藤「ふざけんな、おい、ついてくるなよ、
じゃあな」

SE 自転車が走り出す音。

スクーターの走るエンジン音。

佐藤「だから、ついてくんなくて！」

トーコ「きやはは、待ってよー」

M

SE 自転車の走る音とそれに並走して走る
スクーターの音。

佐藤「(独り言) まったく、こいつ本気でふ

きだし公園までついてくる気かよ」

トローコ「ふー、やっと定山溪だね、やっぱり観光地だ、あっちこっちに観光バス。ちよーうど今は夏休み真っ最中だもんね」

佐藤「くそ、みんなのん気な顔してるなあ」
トローコ「しっかし、またなんでママチャリなわけ？ 最低でも電動自転車とかあるでしょ」

佐藤「（独り言）そんなもの買う金があったら、じいちゃんに金借りようなんて思わないって言うの」

トローコ「なに？」
佐藤「なんでもねーよ」

トローコ「でもさ、変な感じ。いつも学校ではすまし顔で勉強しているアッキーが自転車で京極町目指して走ってるなんて。しかもカップ麺のお湯汲むために、くくくっ」

佐藤「うるさいな」
トローコ「（笑いながら）これから先は、ついに峠越えだよ、いつもすましてるアッキーの必死な顔、見るのが楽しんだ。へへへっ」
佐藤「お前本性格悪いな、いい加減帰れよ」
トローコ「嫌です。帰りません、にやははは」
佐藤「くっ、こいつ」

SE 自動車坂道を行き交う音に混じり自転車漕ぐ音。

M

トローコ「やっぱり中山峠の坂はきついねー」
佐藤「はあ、はあ、予想通りっていえば、予想通りだな。ぐっ、車も飛ばしてくるし、すっごい走りにくいな。うわっ危ねえ！」

SE 車の急ブレーキ音と走り去る音。

佐藤「はあ、はあ、はあ、死ぬかと思った」
トローコ「大丈夫？ でもさあ、ここまでしてふきだし公園の水でカップ麺作る理由って何なの？」

佐藤「何って？」
トローコ「そろそろいいじゃん、教えてよ」

佐藤「嫌だよ」
トローコ「えー、教えて、教えて、教えてー」
佐藤「子供かよ！ 仕方ないな・・・俺・・・、東京行くつもりなんだ」

トローコ「え？」
佐藤「今日中にふきだし公園の水でカップ麺つくれば、うちのじいちゃんが東京行きの軍資金を貸してくれるっていうから」
トローコ「東京って、学校はどうするのよ？」
佐藤「辞める」
トローコ「はあ？ マジでいつてるの？」
佐藤「ああ、いつも能天気なお前と違って、俺には色々悩みがあるんだよ」

トローコ「何それ？ むかつく言い方。あたしだって悩みぐらいありますう」
佐藤「ホントかよ、またどうせ髪型が決まらないとか、大した悩みじゃないんだろ？」

トローコ（小声で）「そんなんじゃないもん」

佐藤「なに？」
トローコ「うるさい！ 頭来たから先いく。じやあね。のろまな亀さん！ バイバイ」

SE スクーターが走るエンジン音。

佐藤「おい！ だれが亀だ！」

M

SE ゆっくりと自転車のペダルを漕ぐ音。

佐藤「（荒い息）はあはあ、汗が止まらねえ。それにしても遠いな。峠入って2時間。くそー、なんて坂だ、全然スピードがでない」

SE 上のほうからトローコの叫ぶ声。

トローコ「おーい。ほら、アッキー！ 頑張つて、あと少しで峠の頂上だよ。根性だしな、根性！」
佐藤「はあ、はあ、何が根性だよ。スクーターでできるからって簡単に言いやがって」

SE 自転車を漕ぐ音、止まる。

佐藤「はあ、はあ、はあ、よし、なんとか上りきった、やっと頂上だ。はあ、はあ」
トローコ「ご苦労！ ジャーン、みて、中山峠

名物あげ芋。羊蹄山見ながら食べるあげ芋は最高だよ。それにしても、アッキー鈍臭いから、待ってる間に2本も食べちゃった」

佐藤「はあはあ、鈍臭いって、ふざけんよ、お前も自転車でこの坂上ってみろよ！」

トローコ「自転車で？ 無理無理、あたし弱い女の子だもん。そんなことできませんわ。どう食べかけただけど食べる？ あげ芋」

佐藤「はあ、はあ、いらねーよ」

トローコ「あらそう、こんな美味しいのに残念。」

(あげ芋を食べる音)やっぱりおいしい！

佐藤「はあ、はあ、本当、能天気なやつだな。」

はあ、はあ・・・あっ！

トローコ「きづいた？ 夕日に羊蹄山。ここからだとめちやくちや綺麗に見えるでしょ？」

佐藤「すげえ・・・」

トローコ「こういうの見たとき、行きたくなくなるよね・・・別のところなんて」

佐藤(MO)「中山峠からみる夕日に照らされた羊蹄山は、毎日見ているモノトーンの

日常とはまったく違い、鮮やかな色をしてた。そしてそれを見つめるトローコの横顔は、一瞬すごく悲しそうに見えた」

トローコ「え、何？ 人の顔見つめちゃって、もしかしてこれってやばい雰囲気？ キヤ

ー、あたしにほれちゃった？ ねえ」

佐藤「ば、ばかいうなよ、もう行くぞ。坂道のぼっちゃえばこっちのもんだ、あばよ！」

SE 自転車坂道を下る音。

トローコ「あー、ちよっとまってよ、まだあげ芋食べ終わってないのに！」

M

佐藤(MO)「それから、峠を一気に下り、ひたすら自転車を漕ぎ続けた。ただひたすら。まだ見ぬ東京の生活を夢みながら・・・」

第2話 完

SE スクーターで走る音、とまる。

トローコ「到着！ いやーやっぱり遠いわ、ふきだし公園。もう辺りは暗いし。ねえ、アッキー・・・ってまだあんな後ろ。まあ、しかたがないか自転車だもんね」

SE 自転車をゆつくりと漕ぐ音。

佐藤「はあ、はあ、はあ、ゲロ吐きそう」

M

SE 自転車を漕ぐ音、ゆつくりと止まる。

佐藤「はあ、はあ、はあ・・・ホント信じられないくらい遠いな。もう・・・倒れそう」

トローコ「おつかれ、やっど追いついたね、そこ降りたらもうふきだし公園だよ」

佐藤「はあ、はあ、はあ(呼吸を整え) ああ」
トローコ「しっかし、本当に自転車でふきだし公園に来ちゃったね」

佐藤「本当、人間やればできるもんだな、はあ、はあ、はあ」

トローコ「だね、さあ、水汲み場におりようよ」

SE 湧き水が流れる滝の音。

トローコ「(水を飲む音) ぶはあ、なにこれ？ すっごいおいしいんだけど！」

佐藤「(水を飲む音) ああ呼吸するのも忘れるぐらいうまい! 水がこんなにうまいなんて。体に水分が戻ってくるのがわかる」
トローコ「あはは、ずっと自転車漕いでたしね」

SE 佐藤がその場に座り込む音。

佐藤「あー、しっかし、まじで疲れた!」

トローコ「ほら、まだ仕事があるでしょ。ペ
ットボトルにカップ麺の水汲まないと」
佐藤「ああ。そうだな」

SE ボトルに水が入ってくる音。

トローコ「ところでさ、結局東京に行きたいって
て思わせる悩みってなんだったの?」

佐藤「何って・・・」

トローコ「そう、何?」

佐藤「先の決まった人生がいい加減、嫌にな
ったんだよ。毎日毎日、家と学校と塾の往
復。親はいい大学に入るために勉強しろつ
てうるさいし、学校はつまらないしさ」

トローコ「なーんだ、悩んでそんな事?」

佐藤「あ? そんな事ってなんだよ!」

トローコ「だって、もつと深刻な悩みかと思っ
たからさ」

佐藤「お前みたいに何も考えないで自分勝手に
に生きてるやつに俺の気持ちかわかるか
よ!」

トローコ「は、あたしが自分勝手に生きてる?」

佐藤「だってそうだろ? 能天気にもヘ
ラヘラしてさ、あーあ、変わるもんなら
俺もお前みたいになりたいよ」

トローコ「アッキーはあたしの何がわかるの?」
佐藤「あ?」

トローコ「そのつまらないっていう日常を変え
るために今までなんかしてきたの?」

佐藤「なんかかって・・・、やるだけ無駄だろ、
こんな所で頑張ったって何も変わらないだ
ろ」

トローコ「結局、現実から逃げたいだけじゃん」
佐藤「なんだと!」

トローコ「はつきりって、そんなんじや、東京
に行っても同じだと思おうよ」

佐藤「うるせーんだよ。お前に何がわかる!」
トローコ「わかってないのはアッキーの方だよ」

M

SE 自転車とスクーターが道を走る音。

佐藤(MO)「それからトローコとは会話は無
く、気まずい空気のまま、帰りは無言で暗
い夜道を走った。辺りは真っ暗だったので
怖かったのか、それとも俺に気を使ってく
れたのか、結局トローコは俺のスピードにあ
わせて走ってくれた」

SE 自転車とスクーターが走る音。
自動車を通り過ぎる音。

佐藤(MO)「その間、僕はずっと、トロー
コに言われた言葉を考えていた。悔しいけど、
考えれば考えるほど、返す言葉が見つから
なくなっていく」

M

SE 自転車をこぐ音、止まる。

佐藤が袖をまくり時計を見る音。

佐藤「ふう、0時まであと2時間、中山峠の
出口まであと少し。ここまでくれば約束の
時間には、家に戻れそうだな」

SE スクーター音、エンストを起こしそ
うな調子が悪い音。

トローコ「ちょっと、何これ?」

SE エンジンの停止音。

トローコ「マジで? ちょっと何なのよ、こん
なところで止まんないでよ!」

SE 自転車が近づく音。

佐藤「(気まずそうに) どうした?」

トローコ「あつ(気まずそうに) なんか・・・
いきなりエンジン止まっちゃったんだけど」

佐藤「エンスト？ ちょっとみせて・・・これって、ガソリンが足りないんじゃないか」
トローコ「でもガソリンのメーターはまだいけそうだけど」

佐藤「ガソリントタンクを開けてみよう、前に友達から同じような話聞いたことあるんだ」

SE ガソリントタンクを開ける音。

トローコ「え？ あ、本当。中身空っぽ。メーターが壊れてたんだ」

佐藤「困ったな、こんなところにガソリントタンクなんてないし」

トローコ「ねえ・・・」

佐藤「ん？」

トローコ「先行きなよ。ぎりぎりでしょ、時間」

佐藤「先行けって、こんな山道で女一人、置いていけるわけないだろ？」

トローコ「大丈夫。あたしには制限時間ないからゆっくりスクーターを押して帰るよ」

佐藤「何いってるんだよ」

トローコ「早く行きなよ。東京行くんでしょ？ そのためにもここまで頑張ってきたんじゃない」

佐藤「でもさ・・・」

トローコ「早くいきなよ！ アッキーの決心ってその程度だったの？ 早く行けって！」

佐藤「そんなこと言ったって」

トローコ「はあ、ホント無理。そんな気持ちでここまで走ってきたんだ？ だったら最初っからこんな無駄な事すんなよ！ バカじ

やないの？」

佐藤「何だよ、その言い方！ 人が心配してやってるのに。もう知らねえぞ！」

トローコ「心配なんてしてくれなくて結構、バイバイ」

佐藤「たくっ、勝手にしろ！」

SE 自転車が走り出す音。

だんだんと自転車が遠ざかる音。

そして、静寂。

トローコ「・・・いっちゃった。ふー、えいしよっと」

SE スクーターを手で動かす音。

トローコ「トットトット、あーこりや重いな・・・」

SE スクーターを押す音。

トローコ「アッキー、これで今日中には家に帰れるかな。あーあ、これが最後の会話になるなんて、・・・（寂しそうに）うまくいかないな」

SE 自転車で坂道を下る音。

佐藤「たく。なんなんだよ、あいつ、あんな言い方ないよな」

SE 自転車が立ち止まる音。

佐藤「そうだよ・・・、俺は東京行くために走って来たんだ、こんなところで立ち止まってるかよ。そもそも、勝手についてきたんだし。関係ねーよな・・・あんな奴」

SE 数秒置いてまた走り出す自転車。

SE だんだん遠ざかっていく自転車の音。

第3話 完

SE スクーターを押して進む音。

トローコ「ふう、マジで重い。動かなくなるとスクーターって鉄の塊なんだなあって実感する。あ、えっ、何？ キヤー！」

SE 車の急ブレーキ音と走り去る音。
スクーターが倒れる音。

トローコ「バカヤロー！ あぶねえだろ。誰もいないと思って飛ばし過ぎだっつーの！」
トローコ「危うくひき殺されるところだった。もう！」

SE スクーターのハンドルに手をかけて起こそうとする音。

トローコ「ヨッコレセつと、重つ。つてキヤー！」

SE 車の急ブレーキ音と走り去る音。
スクーターが倒れる音。

トローコ「もう、いや！」

SE その場に座り込む音。

トローコ「はーあ、アッキー今頃、どの辺だろ？ 参ったな。これからどうしよ」

SE 遠くから聞こえる自転車が近づいてく

る音。

トローコ「ん？」

SE 自転車の上ってくる音、だんだん近づく。

佐藤「はあ、はあ、はあ」
トローコ「え？」

SE 自転車がだんだんと近づいてくる音、そして自転車が止まる。

トローコ「アッキー……、なんで？」

佐藤「やっぱり放っておけないだろ、ほら、スクーター貸しな。自転車は頼む」

トローコ「あんたバカじゃないの？ 折角ここまで来たのに、いけなくなっちゃうよ東京。おじいちゃんにお金借りるんでは？」

SE スクーターを起こす音。

佐藤「うお、結構重いな、これ」

トローコ「ねえって！」

佐藤「もういいんだよ」
トローコ「よくないよ！ せっかくここまできたのに、あたしのせいで全部無駄になるなんて、絶対いや！」

佐藤「お前のせいじゃないよ」
トローコ「え？」

佐藤「俺さ、公園でお前に言われたこと、走りながらずっと考えてたんだ」

トローコ「え、(気まずそうに) ごめん、さっきはちよつと言い過ぎだったかも……」
佐藤「いや、いいよ。本当の事だから。俺、無理とか無駄とか言って、今まで何も変えようとしてこなかった。やっぱり東京行って未知の可能性を探すのは、こっちでやる事すべてやってからの話だよな」

トローコ「……アッキー」

佐藤「はじめは無理だと思ったけど、自転車でふぎだし公園だっけ行けたんだもん」

トローコ「(笑いながら) うん」

佐藤「……あのさ」

トローコ「ん？」
佐藤「夏休み終わったら、また一緒に、その、嫌じゃなかったらどっかいかないか？」
トローコ「それって……もしかしてデートの誘い？」

佐藤「え？ え、まあ。そうなるかな」
トローコ「きやはは、アッキーがそんなこというなんて、意外なんだけど」

佐藤「おい、茶化すなよ」

トローコ「でも……ごめん、それは無理かな」
佐藤「あつ(慌てながら) そうだよな。ごめん、俺、変な事言った。忘れてくれ」

トローコ「違うの！」

佐藤「え？」
トローコ「実はあたし、夏休みが終わったら福岡に引っ越すんだ」

佐藤「え？」

トーコ「お母さん、すすきので小さなスナックやつてただけど、不況の影響でね。店しめるんだ、それで親戚のいる福岡に引っ越すの、2人家族だからね、仕方ないんだ」

SE トーコ、佐藤に抱きつき佐藤の胸に顔を埋める音。

トーコ「あたし、北海道の風景が好き、北海道のにおいが好き、北海道のみんなが好き、それに、アツキーのことが（啜り泣く声）」

佐藤「トーコ・・・」
トーコ「今日はありがとうね、最後にアツキーーといい思い出ができて本当に良かったよ」
佐藤「俺のほうこそ、ありがとうな。能天気だとか何も考えて無いとか言つて、ごめん。考えが足りないのは俺のほうだった」

トーコ「ううん・・・いいの」
佐藤「そのうち、その・・・福岡に会いにいってもいいかな？」

トーコ「（笑い声で）うん・・・待ってる」
佐藤MO「その時のトーコの笑顔は今まで見たことがない大人の表情だった」

SE 道路を走る自転車の音。

M

SE 家の襖が開く音。

佐藤「ただいま・・・て、やっぱりじいちゃん、寝てるか」

章次「ん、うーん、ふああ（大きなアクビ）」

佐藤「あ？ じいちゃん起こしちゃった？」

章次「今何時だ？」

佐藤「深夜の2時・・・だね」

章次「そうか」

佐藤「うん・・・ごめん、間に合わなかった」

章次「水は？」

佐藤「え？」

章次「水、汲んできたんだろ？」

佐藤「うん」

章次「貸しな」

SE ヤカンがお湯を吹く音。

章次「おー、沸いた沸いた、では」

SE カップ麺の蓋をあけ、お湯をカップ麺に注ぐ音。

佐藤「じいちゃん、俺・・・」

章次「まあ、これ、食ってみい」

佐藤「えっ、でもまだ早くないかな？」

章次「いいから、はやく」

佐藤「うん、じゃあ」

SE 麺を啜る音。

佐藤「かたつ、じいちゃんやっぱりこれ半生だよ。まだ時間早いよ」

章次「ははは、そうか、さてそろそろこっちは丁度いいかな」

SE 麺を啜る音。

章次「うほっ、うまい！やっぱりお湯を注いでから3分は必要だな」

佐藤「ずるい、自分だけ美味しいの食べて」

章次「なあ、彰。お前が食べたそれは、今のお前だよ」

佐藤「え？」

章次「麺は、お前の心。その湧き水のお湯は、お前を取り巻くこの北海道の環境だな。そして待ち時間は・・・経験だよ」

佐藤「このカップ麺が・・・今の、俺」

章次「人生もそのカップ麺と同じで食べ頃っていうのがあるんだよ。早すぎてもだめ、遅すぎてもだめ。丁度いい頃合っていうのがな」

佐藤「食べ頃・・・」

章次「若いうちは、色々悩んで経験して大きくなればいい。焦るな彰。それに・・・」
佐藤「それに？」

SE 麺を啜る音。

章次「こんなうまいものは東京にはないぞ」

SE 麺を啜る音。

佐藤「・・・だね」

章次「(笑いながら) だろ」

佐藤(MO)「十七歳の夏休み、僕はある決心をした。他人には対した事じゃないかもしれないけど、僕にとっては大きな決断だった。でも実行はもう少し先送りしようと思う。いつになるか解らないけど、僕の中のカップ麺が、食べ頃になる残りの時間まで・・・」

第4話 完